

Title	永嘉四靈の詩學再検討：および彼らと江西詩派との関係について (上)
Sub Title	Revisiting Yongjia siling's poetics and their relations to the Jiangxi school (part 1)
Author	錢, 志熙(Qian, Zhixi) 種村, 和史(Tanemura, Kazufumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.44 (2012.) ,p.35- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20121231-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

永嘉四靈の詩學再檢討

——および彼らと江西詩派との關係について——
(上)

錢 志熙 著
種村 和史 翻譯

〔譯者凡例〕

- 本稿は、北京大學中文系教授錢志熙氏の「永嘉四靈詩學的再探討——兼論其與江西詩派的關係——」（『文學理論研究』2008年第2期）の翻譯である。上下二篇に分けて發表する。
- 引用原文には書き下し文もしくは現代語譯を併記した。
- 文中の（ ）は引用原文および著者による説明を，〔 〕は譯者による補足説明を示す。
- ＊1，＊2……は著者による注を，（1）（2）は譯者による補注を示す。
- 補注には、引用された文獻を可能な限り原典に当たり、詳しい出典情報を補記した。唐代の詩人の作品は、『全唐詩』（中華書局排印本）、宋代の詩人の作品は『全宋詩』（北京大學出版社。『全』と略稱）に據った。『全唐詩』は、卷數、頁數を算用數字で示した。224-2396は、卷二二四、2396頁を表す。『全宋詩』は、卷數、冊數、ページ數を算用數字で示した。2815-54-33506は、卷二八一五、第54冊、33506頁を表す。四靈の作品については、著者が『永嘉四靈詩集』（陳增傑校點、兩浙作家文叢、浙江古籍出版社、1985）をテキストとしていることに鑑み、『全宋詩』の他にこのテキストの卷數とページ數を示した。この書は、四靈の詩集ごとに作品を收録しているが、出典表記は以下のように略稱を用いた。

『芳』（徐照『芳蘭軒詩集』）

『二』（徐璣『二薇亭詩集』）

『葦』（翁卷『葦碧軒集』）

『清』（趙師秀『清苑齋詩集』）

はじめに

永嘉四靈⁽¹⁾の詩學的主張の多くは、葉適⁽²⁾らの人々によって記述されている。葉適は、地縁などの理由による関係から、最も早い時期に四靈を発見し顕彰した。さらに、彼は四靈についての系統的な批評を行ったが、中でも、彼らを中國古典詩歌史の系譜に位置づけた上で評価をしたことは、文學に關心を有する思想家の絶大なる手腕のたまものと言うにふさわしい。後に、呉子良⁽³⁾・劉克莊⁽⁴⁾・方回⁽⁵⁾といった人々は、葉適の後を繼いで、それぞれに四靈の詩學に對して獨自の説明と批評を行った。彼らの敘述は、四靈自身の理論の不足を補い、四靈が當時に與えた影響がどこから生まれたか、彼らがなぜ詩歌史における地位を占めることができたのか、を考える上できわめて重要な資料となっていると言ふことができる。またそれ自體が、宋代において詩歌の創作と詩歌の評論とがお互いに助け合いつつ成立していたことを證明する具體例として重要な意義を持ち、宋代詩史の特徴を理解するのに役立つ。

しかし、葉適らの人々による四靈の詩學についての解説が、この上ない批評文獻であることは間違いないが、それらは四靈自身の詩學を完全に代替し得るものではない。それらと四靈自身の詩學の間には、いくつかの重大な懸隔が存在しさえしている。例えば、葉適らの解説では、四靈と江西詩派との関係が單純化されているきらいがある。その他にも、詩學の内實的な部分について、葉適らの解説は四靈の精髓を充分に明らかにしているとは言いがたい。

筆者は先に四靈と、兩宋時期の温州の地域文化・地域の詩風との関係を分析した^{*1}。本論では、四靈の詩學それ自體に視點を据えて、可能なかぎり完全な論述を行っていきたい。

1. 「話頭」——四靈の詩論の特徴——

兩宋は詩歌理論が発達し、詩を論ずる風氣が非常に盛んになった時期である。この時期の詩論には、二種類の形式がある。一つは首尾が整った體系的な詩論であり、もう一つは先人の説を論破し自身の説を立てる、議論體の詩論である。そうした中で、四靈は特殊な部類に屬する。彼らの詩風には當時の風氣を變革する傾向があると認められているが、しかし彼らには何らかの理論を提示した著述はない。嚴羽⁽⁶⁾の『滄浪詩話』や姜夔⁽⁷⁾の『詩說』のような正式な詩論の著述がないばかりか、當時流行していた詩集の序跋のたぐいの

文章すら見ることはできない。後者は、彼らの政界および文壇での身分が比較的低く、名聲と權勢を持つ大臣ではなく、文壇で地位のある存在でもなかったことと關係する。理論を重視する傾向が普遍的に見られる兩宋期において、理論的な著述を持たないという現象はそれ自體、四靈詩派の一つの特徴と見なすことができる。

理論とは、文學創作から直接的に派生して提示されるのではなく、往々にして創作の場以外の何らかの機縁があつて提示されるものである。例えば、反對者からの批判とか、後繼者への傳授とか、またあるいは體系を構築したいという思想的な欲求からなされることもある。理論の提示を生み出すこのような機縁は、理論のコンテクストと表現してもよいかもしれない。さまざまな面から考えて、四靈という詩人たちには理論的コンテクストが缺けていた。確かに、彼らには永嘉學派という學術的背景があり、陳傳良⁽⁶⁾と葉適という二人の大思想家の影響を受けてもいたが、彼ら自身が學術に對して何らかの興味を持っていた痕跡は見あたらない。

このような状況も、恐らく彼ら自身の位置づけと關係があつたであろう。永嘉の地で學術が発達し學派が形成された後、この地域内の學者たちはすでにある意味で、流儀ごとに分離し分業體制をとっていたように思われる。經學史學の學者たちと詩人墨客とは、すでにかなりははっきりと分かれていた。もともと魏晉時代に文學が発達して以後、士人の集團は儒林（學者）と文苑（詩人）という二つの領域に、相對的に分離していたのだが、このような分派は、ある時期、ある流派で非常に際立って現れたのである。

もちろん、永嘉の學術と科擧とによる刺激があつたために、四靈は經學史學においても、一定の基礎と造詣とを有してはいた。例えば、徐照「徐文淵の省試に赴くを送る（送徐文淵赴省試）」詩⁽⁷⁾の中で、徐璣を「孤經 榜首を期せん（孤經期榜首）」〔大意——孤獨に經の研究にいそしんできたあなたは、必ずや今回の省試において主席で合格するであろう〕と稱えており、趙師秀の名句「輔嗣^{ほし}の易行はれて漢學無し（輔嗣易行無漢學）⁽⁸⁾」〔大意——玄學を奉じた魏・王弼^{おうひつ}、字は輔嗣が、易の哲理を明らかにする姿勢で著した易の注釋が世に行われたことによって、字句の訓詁を重んずる漢學が廢れた〕の句は、易學の源流を的確に説明したものといふことができる。しかしながら、彼らは事々に自らを林下の士〔隱逸の士〕に喩えており^{*2}、事功〔現實社會の問題の解決に役立つことを目指した學問を行うこと。葉適らの永嘉學派の主張〕を任務としていないばかりか、經史の研究に専念せず、自らの専門として詩歌を選擇した。これは非常に自覺的な専門意識といふことができる。

このような意識が恐らく、永嘉學派という背景を持っていたにもかかわらず、彼らが理

論的なコンテクストを缺いていた重要な原因の一つになっていたと考えられる。この他に、四靈は中晩唐の苦吟の詩風を提唱したが、この一派の詩人はもともと具體的な創作のみを重視し、理論的な體系を構築することに重きを置かなかったということも原因としてあげられる。

とは言え、四靈は詩を論ずることを得意とはしていなかったけれども、自らが詩を作る様子を、その詩中に詠い込むことを非常に好んだ。これは、四靈が詩を専門とし、詩作に關する事柄ばかりを考えていたために、自らの作詩體驗を敘述すること自體が、重要な表現對象となったのであろう。四靈詩の名句には、詩作について述べたものが少なくない。例として數聯を挙げ、その一斑を窺おう。

一月無新句　　一月　新句無く
千嶺役瘦形　　千嶺　役せられて瘦形あり

〔◆嶺 『全』『岑』に作る。〕

(徐照「白下」⁽⁹⁾)

客懷隨地改　　客懷　地に隨ひて改まり
詩思出門多　　詩思　門を出づれば多し

(徐璣「憑高」⁽¹⁰⁾)

傳來五字好　　傳へ來たる　五字　好し
吟了半年餘　　吟じ^{おは}了る　半年餘

(翁卷「葛天民に寄す(寄葛天民)」⁽¹¹⁾)

一片葉初落　　一片　葉　初めて落ち
數聯詩已清　　數聯　詩　已に清し

(趙師秀「秋色」⁽¹²⁾)*3

詩中で詩を作る自らの姿を詠い込むことは、『詩經』『楚辭』中にすでに見られる。しかし、六朝から盛唐にかけては、詩歌が詠うべき對象が傳統的に定まっていた、詩歌そのものの、あるいは詩歌の創作活動そのものは、詩歌の表現すべき類型的な題材とはなっていなかった。杜甫に至って、ようやく詩中に自らの作詩行爲について詠うことが比較的多く見られるようになり、中唐の苦吟派に至って、とりわけ好んで詩中で詩を吟ずる苦しみを訴えるようになった。例えば賈島の、「二句　三年にして得、一吟するに雙淚流る(二句三年得、一吟雙淚流⁽¹³⁾)」のような詩作を題材とした句がこれに當たる。嚴密に言えば、詩

作を自述するような詩篇および詩句は、詩論とは言えず、ただ詩人が、自己の創作の状況を表現したもの、あるいは詩を吟ずる人物のイメージとして自分自身の姿を描き出したものにすぎない。

自身の藝術創作に身を捧げている詩人は、必ずしも詩を論ずる文章を著すとは限らないが、日常的に詩を論じ藝術を話題にし、それが必ず多くのエピソードとして語り伝えられるものである。四靈の諸家が、頻繁に自身の詩作について描寫していた以上、平素互いに談話する折には、必ずや詩についての話題を取り上げたはずである。しかし、このような口頭の状態に属する詩論・詩評は、その多くが世に傳わることなく消えてしまうものである。今に傳わる、四靈が詩を論じた二、三條のエピソードは、後の人々が語り伝え書き傳えたことによって残ったものである。例えば、劉克莊『後村大全集』卷九四「野谷集序」に、趙紫芝〔趙師秀〕の言葉が引かれている。

一篇〔の五言律詩〕は、幸いにも四十字だけである。もしこれに一字でも増えたら、私にはどうすることもできなかったであろう（一篇幸止有四十字，更増一字，吾末如之何⁽¹⁴⁾）

また、〔元〕韋居安^{い きよあん}『梅磡詩話』に次のようにある。

杜耒^{とらい}，號は小山^{しょうざん}はかつて詩句を作る法を趙師秀，字は紫芝に問うた。趙師秀はこれに、「ただ梅の花を數斗食らい，胸の内を清らかに透き通らせたならば，自然と詩が作れるようになる」と答えた。これを聞いて戴復古^{たいふつこ}，號は石屏^{せきへい}〔1168～？。江湖派の代表的詩人〕は、「一時の戯れの言葉ではあるけれども，後の世に傳えるべき教えである」と言った（杜小山未嘗問句法於趙紫芝。答之云，但飽喫梅花數斗，胸次玲瓏，自能作詩。戴石屏曰，雖一時戲語，亦可傳也^{*4)}）

このような口頭で詩を論じた言葉というのは、理論家から見れば深みに缺けているということになるが、しかし創作者が日常的に創作について話す場合は、おおむねこうしたものである。彼らが藝術活動を通じて追求した主要な事柄は、日常ふと口に上った片言隻語の中に含まれている。このような散り散りばらばらの、口頭禪のような言葉から、往々にして、彼らが日ごろ全身全霊で構築しようとしている詩歌藝術の世界の實際の姿を窺うことができるので、詩學的言辭として取り扱わなければならないのである。

劉克莊「蔡絳主簿の詩卷に題す（題蔡絳主簿詩卷⁽¹⁵⁾）」に次のように言う。

舊止四人爲律體	舊には 止だ四人のみ律體を爲りしに
今通天下話頭行	今は天下を通じて 話頭 行はる
誰論宗派應添譜	誰か宗派を論じて應に譜に添ふべき
要續傳燈不記名	傳燈を續ぐを要むれども名を記せず
放子一頭嗟我老	子に一頭を放して 我老いたりと嗟き
避君三舍與之平	君に三舍を避けて 之と平らかならん
由來作者皆攻苦	由來 作者 皆な攻苦す
莫信人間七步成	信ずる莫かれ 人間 七步にして成るを ^{*5}

「話頭」とは、日常的に絶えず觸れられる話題のことで、往々にして、ある事物に對する人々の重要な考え方を示し、今言うところの主張とか觀點とかに近い。詩中で「話頭」と言っているのは、すなわち詩を論じた話題のことである。陳亮^{ちんりやう}「賀新郎・寄幼安見懷韻」に、「只だ君をして從來 我と話頭 合ふこと多から使む（只使君從來與我，話頭多合^{*6}）」と言い、劉克莊「四たび和す（四和⁽¹⁶⁾）」詩に次のように言う。

紹興讜議誰當續	紹興の讜議 誰か當に續ぐべき
元祐全人本不多	元祐の全人 本と多からず
辦取九年同面壁	辦取す 九年 同に壁に面するを
未應末後話頭蹉	未だ應に 末後 話頭 蹉せず

「話頭」には、また「口實」という意味もある。方岳^{ほうがく}「聞き罷はる（聞罷⁽¹⁷⁾）」に次のように言う。

舊藁如山應有語	舊藁 山の如くして應に語有るべきも
老夫於世本無求	老夫 世に於いて 本 求むる無し
一犁春雨平生事	一犁の春雨 平生の事
莫與諸公作話頭 ^{*7}	諸公と話頭と作す莫かれ

「話頭」の語が正式な詩論の中で用いられた例としては、右に挙げた劉氏の詩句の他に、

〔宋〕呉可^{こ か}『藏海詩話』の次の條がある。

參寥^{しんりよう}「細雨」に、「細は憐む 池上に見ゆるを、清は愛す 竹閒に聞こゆるを」と言う。荊公王安石^{おうあんせき}は「憐」の字を改めて「宜」に作った。また公の詩に、「暮雨の邊」と言う語がある。これに對して、秦觀^{しんかん}、字は少游^{しょうゆう}が次のように言った、「王公はこの表現を作る境地まで達していた。「雨中」、「雨傍」の語ではいずれもよくない。「雨邊」だけがもっともすばらしい」と。これを評するに、「雨傍」では言葉にならないけれども、「雨中」としていったい何が悪かろう。これは秦觀が戯れの發言をしただけなのだ。どうしてこれを「話頭」とするに足りようか（參寥細雨云、細憐池上見、清愛竹閒閒。荊公改憐作宜。又詩云、暮雨邊。秦少游曰、公直作到此也。雨中、雨傍皆不好。只雨邊最妙。評、雨傍不成語、雨中有何不可。此是秦與之作劇耳、何堪舉作話頭邪^{*8}）。

呉可の言う「何ぞ舉げて話頭^なと作すに堪へんや」とは、詩を論じた「話頭」の意味であり、劉克莊が「舊は止だ四人のみ律體を爲りしが、今は天下を通じて 話頭 行はる」と言うのと意味が近い。ここからわかるように、劉克莊のいわゆる「話頭」とは、四靈および彼らに追隨した江湖派の詩人が日常的に詩を論じた際に述べた信條や主張のことを指し、その中の最も重要な意見が、唐律を鼓吹することであった。だから彼は、「昔は、四靈のみが〔晚唐體の本質的詩體として〕律詩を〔重んじ〕作ったものだが、今では天下を通じて〔彼らの律體重視の主張が〕作詩の重要な教えとして行われている」と言っているのである。「話頭」という語は、四靈の詩論の特徴を概括する言葉として用いることができる。彼らは常に、素朴な言葉によって繰り返し繰り返し詩歌の宗旨を教え廣め、詩作において持つべき趣味と心得を指し示したのであり、議論體や體系的な形式によって詩を論じなかったのである。

2. 四靈詩學の重要概念

四靈詩學は、詩のスタイルを何より重んずる。その最重要概念は、「唐體」「唐律」「唐詩」である。

字學晉碑終日寫 字は晉碑を學びて終日寫し

詩成唐體要人磨　　詩は唐體を成して人の磨するを要す

(徐照「徐璣に酬贈す(酬贈徐璣)⁽¹⁸⁾」)

詩得唐人句　　詩は得たり　唐人の句

碑臨晉代書　　碑は臨す　晉代の書

(徐璣「劉明遠の家を移すに次韻す　三首(次韻劉明遠移家三首)」〔其二⁽¹⁹⁾〕)

玄暉詩變有唐體　　玄暉　詩　變じて　唐體有り

(趙師秀「秋夜　偶^{たまた}ま書す⁽²⁰⁾」)

宋人が言う「唐體」とは、永明體〔南朝・齊の永明年間、483～493、に形成された、聲律を重んじる詩風。沈約^{しんやく}・謝朓^{しゃちょう}などを代表的詩人とする〕を淵源とする近體詩を指す。ゆえに時にまた「唐律」とも稱する。永明から唐宋に至るまで、近體詩の系統は、一面では絶えざる發展を遂げたが、別の面では、常に疑念の對象としての地位に甘んじ續けていた。少なくとも理論上は、詩道の正統としての地位を勝ち取ることにはなかった。とりわけ、初盛唐の際の復古詩學、中唐の韓〔愈〕孟〔郊〕と元〔稹〕白〔居易〕兩派の詩學、北宋の歐〔陽脩〕梅〔堯臣〕蘇〔舜欽〕から蘇〔軾〕黃〔庭堅〕一派の詩學に至るまで、すなわち唐宋詩歌の本流と言うべき詩歌の流れにおいては、詩歌の形式については、いずれも基本的に古體を尊重し律體を軽く見るという認識を持っていた。

唐宋詩學は、復古を以て革新と見なすという信條を有していたが、詩の形式という角度から見ると、相繼ぐ革新の波とは、近體から古體への回歸運動の繰返しであったとすることができる。それは、一つには直接的に各種類の古體詩を創作するという形で現れ、また一つは、古體の風格によって近體を變えるという形で現れた。永嘉四靈の詩學が、彼ら以前のこのような詩學の流派と異なる最大の點は、明確に唐律を肯定し、古體を尊重し律體を輕視するという詩形式についての考え方から初めて徹底的に脱却し、これを否定さえしたということである。葉適「徐道暉墓誌銘」に次のように言う。

徐照は……詩數百篇を作った。それらはみな實に優れた構想で、いずれもよこざまに飛び越えたかと思うとあっという間に立ち上がり、氷が懸かったかと思うと雪を跨ぎ超えるかのようで、讀者はその變化跳躍に心打ち震え、うちうなずきながら、いつまでもいつまでも吟じつつ感嘆するのである。しかし、その詩は特異な言葉を使っているわけではなく、すべて誰でも知っているものばかりである。ただ、他の者は徐照のように表現できないのである。

思うに魏晉の名家は、高邁で深遠な興趣を込めた言葉を發することが多かったが、物そのものの實態に迫るということが少なかった。沈約、謝朓らによる永明體が出て、士人は争ってそれに倣った。當初はなおそのような詩を作るのが非常に困難で、わずかに對句がひとつでもできたら、それでもう世に喧傳されたものだった。そもそも十いくつかの文字を束ね、色彩豊かで、音律にもかなったものとするというのは、なんと難しいことではないか。だから、よくこのような詩を作れる者は、まずその精髓を自己の心の内に獲得し、外物の描寫に託して言語美を實現し、すべての要素を一なる法に叶うように融合し、森羅萬象を内に受け入れ、^{きれい} 猗^き 荅^き 梗^{きよう} の藥草のごとく讀者に裨益したかと思えば、時として天帝となったかのように、すべてをリズムに従って歩みゆかせる。君は尊く臣は卑しく、賓客は從順で主人は和やか〔なように詩句を的確に配置し〕、陸博の彈丸が陣地に投げられ、矢が的を打ち碎く〔ように言語によって、物の神髓を明らかにする〕、これらは、唐の詩人たちのエッセンスである。

しかし、これに厭きた者は、このような詩を弱々しく取るに足らず、道を害するもので、みだりがましくとりとめがなく雅正を亂すものだと言う。朝廷においていにしえより傳わる九つの雅樂を演奏し、廣い袖の衣を着けて優雅に舞いながら、かえって浮薄な響きを雅な音と思い、ほろをつなぎ合わせたものを着ながら見事な刺繡を施した衣と思い込むようでは、いったいいかにすれば〔眞正の〕詩を作れるか見失ってしまうことになる。

そうであるならば、今の人々が悟らない機微を明らかにし、百年ものあいだ廢れていた學問を復活させ、後の人々に再び唐詩を模範として尊ぶようにさせたのは、徐照君から始まったのである。これは文學に心を寄せる人々にとってなんと痛快なことではないか。

惜しいことに、徐照君は長命を與えられず、開元、元和年間の詩人が到達した詩の境地に到達することができなかった。徐照君なき今、彼とともに唐詩を模範として詩作を追求する者に、徐璣、字は文淵、翁卷、字は靈舒、趙師秀、字は紫芝といった人々がいる（徐照……有詩數百，斷思尤奇，皆橫絕欸起，冰懸雪跨，使讀者變踣慄，肯首吟歎不自已。然無異語，皆人所知也，人不能道爾。蓋魏晉名家，多發興高遠之言，少驗物切近之實。及沈約，謝朓永明體出，士爭效之。初猶甚艱，或僅得一偶句，便已名世矣。夫束字十餘，五色彰施，而律呂相命，豈易工哉。故善爲是者，取成於心，寄妍於物，融會一法，涵受萬象，猗荅桔梗，時而爲帝，無不按節赴之。君尊臣卑，賓順主穆。如丸投區，矢破的。此唐人之精也。然厭之者謂之纖碎而害道，淫肆而亂雅。至

於廷設九奏，廣袖大舞，而反以浮響疑宮商，布縷繆組繡，則失其所以爲詩矣。然則發今人未悟之機，回百年已廢之學，使後復言唐詩者自君始，不亦詞人墨卿之一快也。惜其不尚以年，不及臻乎開元，元之和之盛。而君既死，同爲唐詩者，徐璣字文淵，翁卷字靈舒，趙師秀字紫芝⁽²¹⁾

葉適はまた、「徐文淵墓誌銘」を作り次のように言う。

當初，唐詩は長い間廢れていた。徐璣君は友人の徐照，翁卷，趙師秀と議論して次のように言った，「昔の人々は詩句の響きが輕薄か切實か，一字一句がどうかによって詩の巧拙を判斷した。こうしたものはつまり詩經や離騷の精髓なのである。近頃では，いたずらに紙幅を重ね，だらだらとして節度もない。これでどうして名家になることができようか」と。四人の詩の語句は，とうとう精巧さを極めるようになり，これより唐詩はまた世に行われるようになった（初，唐詩廢久，君與其友徐照，翁卷趙師秀議曰，昔人以浮聲切響單字隻句計巧拙，蓋風騷之至精也。近世乃連篇累牘，汗漫而無禁，豈能名家哉。四人之語遂極其工，而唐詩由此復行矣⁽²²⁾）

葉適のこの二篇の序文は，四靈の共通の主義と，彼らがもっぱら唐體を崇敬していたという事實をきわめて明晰に描寫しており，四靈自らによる敘述に比べて，彼らの成し遂げた改革の性質をいっそう浮き彫りにしている。四靈が言う「唐體」「唐風」とは，齊梁の聲律體を淵源とする近體詩のことである。四靈以前には，その實踐から言えば，晚唐五代および宋初の詩壇が，近體詩を主要な形式としていた。とりわけ五代においては，五言律詩が單獨に隆盛を極めていたとすることができる。このような状況と四靈詩學との關係は，すでに多くの學者によって指摘されている。葉適は，四靈が「百年已に廢れるの學を回らせ」たと述べているが，四靈から遡ること百年と言え，おおそ晚唐に相當する。慶暦年間の范仲淹，梅堯臣等の人々以來，晚唐の詩風が振るわなかったというのは定論となっている。それに對して，四靈はもっぱら晚唐を宗とした。

詩傳叔倫句 詩は傳ふ 叔倫の句
眞認貫休顔 眞は認む 貫休の顔

（徐照「信州水南」⁽²³⁾）

古今稱句法 古今 句法を稱し

鳥賀是僧身 鳥賀 是れ僧身

〔◆鳥賀 賈島と李賀。〕

(徐照「葛朴翁に寄贈す(寄贈葛朴翁)⁽²⁴⁾」)

五字極難精 五字 極めて精なり難く

知音合有名 知音 合に名有らん

磨礪又鬢改 磨礪 又た鬢 改まり

收拾一編成 收拾 一編 成る

泉落秋巖潔 泉落ちて 秋巖潔く

花開野徑清 花開きて 野徑清らかなり

漸多來學者 漸く多からん 來たりて學ぶ者

體法似元英 體法 元英に似る

〔◆知音 『全』「知君」に作る。◆又 『全』「雙」に作る。◆元英 玄英。「玄英先生」は唐・方干〔?～888 前後〕の私諡。〕

(徐璣「翁卷の詩集の後に書す(書翁卷詩集後)⁽²⁵⁾」)

君詩如賈島 君の詩は賈島の如く

勁筆幹天巧 勁筆 天巧を幹らす

昔爲人所稱 昔は人の稱する所と爲り

今爲人所寶 今は人の寶とする所と爲る

(趙師秀「山民を哀しむ(哀山民)⁽²⁶⁾」)

在生貧不害 在生 貧しきは害ならざるも

早喪可嗟吁 早く喪するは 嗟吁すべし

天下黃金有 天下 黃金有れども

人間好句無 人間 好句無し

魂應湘水去 魂は應に湘水に去るべし

名與浪仙垂 名は浪仙と垂る

(趙師秀「徐靈暉挽詞⁽²⁷⁾」)

以上の詩に擧がっている賈島^{かとう}〔779～843〕、戴叔倫^{たいしゆくりん}〔732～789〕、方干(玄英)等の
人々は、まさしく四靈の模範とするところであった。しかし、四靈は、晩唐に學ぶとは言
っても、學んだのは晩唐のスタイル、詩を作る上での法則であって、決して、その詩句を
模擬するということではなかった。近體派が古を學ぶ態度は、復古派が古を學ぶ態度と、

この點で異なっている。近體派が古を學ぶ場合は、スタイルや法則を主な學習對象とするのに對して、古體派が古を學ぶのは、風格や内容を主たる學習對象とし、レベルの低い作者は往々にして模擬に流れる傾向があった。

この他、葉適は四靈が唐體を提唱したことを稱揚しているが、一方で彼らが、開元、元和の詩人の境地に達し得なかったと惜しんでもいる。これは、彼が受容し繼承した詩學の觀念が、依然として古體を以て尊しとなし、開元、元和の詩を典範とし、晚唐體では不充分だと考える、慶曆以來の詩學的觀念から完全には脱却しきっていなかったことを表している。

葉適とは違い、四靈は晚唐の苦吟派の詩法に完全に満足していて、開元、元和の詩風を目標とはしなかった。彼らが晚唐以外に、なお遡ろうとした目標があるとすれば、それは六朝・齊の謝朓〔464～499〕、宋・顏延之〔384～456〕、宋・謝靈運〔385～433〕といった人々まで遡ろうとしたのである。例えば、徐照「翁誠之を送る（送翁誠之⁽²⁸⁾）」では、翁卷を「五言 好句多く、顏杜 詩名を減ず（五言多好句、顏杜減詩名）」と稱賛し、南朝の顏延之と唐の杜甫を五言詩の典範としている。これは、顏延之が對句を重んじて、その作品に近體詩の風格があったが故である。

謝朓もまた、四靈にとって重要な學習對象であった。先に引用した、趙師秀の「秋夜^{たまた}偶 書す」に次のように言う。

此生謾與蠹魚同	此の生 ^{みだ} 謾りに蠹魚と同じく
白髮難收紙上功	白髮 收め難し 紙上の功
輔嗣易行無漢學	輔嗣の易 行はれて 漢學無く
玄暉詩變有唐風	玄暉の詩 變じて 唐風有り
夜長燈燼挑頻落	夜長く燈燼きて ^か 挑ぐれば頻りに落ち
秋老蟲聲聽不窮	秋老いて蟲聲 聽くに窮まらず
多少故人天祿貴	多少の故人ぞ 天祿 貴く
肯將寂寞歎揚雄	肯へて寂寞 ^も を將って揚雄を歎ずる

〔◆肯 『全』『猶』に作る。◆玄暉 謝朓の字。〕

この詩から、四靈が唐體の淵源に遡ろうとする時、謝朓に對して一定の關心を示していたことがわかる。また、徐玘「翁千四知縣・千十四郎の山中に隱居するに奉和す（奉和翁千四知縣千十四隱居山中⁽²⁹⁾）」でも、「令弟 小謝の徒、深沉たり 鬱林の麓（令弟小謝

徒，深沉鬱林麓)」と言う。謝朓が詩を論じた言葉に，「すぐれた詩は，彈丸が手から滑り抜けて飛ぶようにできる（好詩如彈丸脫手⁽³⁰⁾）」という言葉があるが，永嘉の四靈もやはり圓熟と靈秀を重んじた。例えば，徐璣の論詩に，

善詩如善韻　　善詩　善韻の如く
 警響間圓熟　　警響　間ま圓熟す
 但令契人心　　但だ人の心かなに契は令めよ
 勿令駭人目　　人の目おどろを駭か令むる勿かれ
（同上）

趙師秀「薛景石に寄す（寄薛景石⁽³¹⁾）」にも「詩篇　老いて漸く圓まどかなり（詩篇老漸圓）」という句があるが，これも謝朓の「好詩は彈丸の手を脱するが如し」という言葉を，ある程度典拠としたものである。

謝靈運に至っては，もとより永嘉の地の詩風の初祖であり，彼が永嘉の山水を吟詠した詩句は，もともと四靈の詩法の重要な淵源の一つとなっている。表面的に見れば，四靈が謝靈運・謝朓・顔延之を學習したことは，近體派の範疇を超えているように見えるが，實際には，やはり近體派の域内に止まっているのである。なぜならば，顔延之・謝靈運を代表とする元嘉〔六朝・宋の年號。424～453〕の詩風のうち，ある種の句法とスタイルはまさしく近體詩の前身であるからである。だから，明清の詩史家が近體詩の源流を論じる場合に元嘉に遡ることが多いのである。古典詩の歴史におけるこのような重要な轉換點について，實際には，四靈派は具體的な實踐を通じて，すでに明清の詩史家の學説を先取りしていたのである。ここからわかるように，四靈が模範とし源泉としたのは晩唐に限定されるのではなく，近體詩の發生した南朝の詩風にも遡るものだったのである。

「句」と「法」とは，四靈詩派のもう一つの重要な概念である。この一對の概念は，近體詩の出現に従って次第に明確化してきたものである。魏晉時代の古詩は自然な抒情と敘事とを重視し，詩全體の構成や氣勢を主要概念とした。したがって，「句」はいまだ，詩歌の中に確固として存在し，意味を表現する單位として機能する獨立した價值を有する存在としては，十分に注意されていなかった。齊梁以降，聲律，對象物を寫實的に表現すること，對句，典故などといった技巧が追求され，形式的要素が發展するにつれて，「句」の働きも重要と認識され始めた。また，それと對應して，「法」という概念も形成され始めた。杜甫が高適に送った詩に，「佳句　法　如何（佳句法如何）」〔「高三十五書記に寄す（寄高三十五書記⁽³²⁾）」という問いかけがあるが，これは，「句」と「法」という相依存し

あう詩學のカテゴリーの實像を非常によく表している。「句」と「法」という二つの詩學上の概念の形成は、近體詩の發生發展と密接に關連していると言うことができる*⁹。

中唐期の大曆十才子以降、句を鍊磨するという風氣がますます盛んになり、晩唐の賈島・姚合〔775～854以降〕の一派に至って、苦吟して字句を彫琢することのみを尊しとするようになった。四靈が詩を論じた「話頭」においては、いっそうしばしも「句」から離れられないようになっている。

五言多好句　五言　好句　多く
顔杜減詩名　顔杜　詩名　減ぜん

(徐照「翁誠之を送る」⁽³³⁾)

一月無新句　一月　新句無く
千嶺役瘦形　千嶺　役せられて瘦形あり

(同「白下」⁽³⁴⁾)

有時吟好句　時有りて　好句を吟ずれば
特地到貧居　特地　貧居に到る

(同「劉孝若に寄す（寄劉孝若）」⁽³⁵⁾)

句向閒中覓　句は閒中に向りて覓め
茶因醉後呼　茶は醉後に因りて呼ぶ

(徐璣「橫碧軒に登りて趙昌甫の作を繼ぐ（登橫碧軒繼趙昌甫作）」⁽³⁶⁾)

覓句行山影　句を覓めて山影に行き
披蓑釣月痕　蓑を披て月痕に釣りす
固貧年八十　固より貧にして　年八十
惟得令名存　惟だ令名の存するを得ん

(同「李商叟の半村堂に題す（題李商叟半村堂）」⁽³⁷⁾)

寥落尋新句　寥落として新句を尋ね
歡娛解宿醒　歡娛して宿醒を解く

(同「江亭にて臨眺す（江亭臨眺）」⁽³⁸⁾)

惟有白衣秦處士　惟だ有り　白衣の秦處士
數篇佳句不曾磨　數篇の佳句　曾て磨かず

(同「九日　懷古堂に上る（九日上懷古堂）」⁽³⁹⁾)

卷中風雅句　卷中　風雅の句

名匠亦難如 名匠 亦た如くのごとくなり難し

(翁卷「晚秋 徐璣の龍溪の丞に赴くを送り、因りて泉南の舊里を過ぎる

(晚秋送徐璣赴龍溪丞，因過泉南舊里⁽⁴⁰⁾)」)

秋來有新句 秋來 新句有り

多半爲黃花 多半 黃花と爲る

(同「即事 懷ひを言ふ(即事言懷⁽⁴¹⁾)」)

覓句行逢鶴 句を覓めて行ゆく鶴に逢ひ

持經坐對花 經を持ちて坐して花に對す

(同「劉高士に贈る(贈劉高士⁽⁴²⁾)」)

詩句空吟得 詩句 空しく吟じ得るも

無人可共評 人の共に評すべき無し

(同「舟行して趙端行に寄す(舟行寄趙端行⁽⁴³⁾)」)

怪得名差異 怪しみ得たり 名 差や異なるを

吟來句極新 吟じ來れば 句 極めて新たなり

(趙紫芝「湯巾に贈る(贈湯巾⁽⁴⁴⁾)」)

古體，歌行が重きを置くのは，篇章をいかに構成するか，主題をいかに立てるかということにあった。それに對して，近體詩の構成は定まっていた章法にも一定の決まりがある。したがって，創作のポイントはいかに句を作るかということに移行した。句を得られればそれで詩はできる，よい句ができればそれでよい詩ができると言ってよい。四靈が日常的に詩を論ずるときも，常々「句を得」という言葉が「話頭」としてあげられている。

又誰憐靜者 又た誰か靜者を憐まん

得句不同看 句を得るも同に看ず

〔◆又「有」に作るテキストもある。〕

(徐照「朱巖伯を送る(送朱巖伯⁽⁴⁵⁾)」)

掩關人迹外 關を掩ふ 人迹の外

得句佛香中 句を得 佛香の中

(同「寺に宿す(宿寺)⁽⁴⁶⁾」)

得句爭書寫 句を得れば争ひて書寫す

蛾飛撲滅燈 蛾 飛びて 撲てば燈を滅す

(同「趙紫芝と同一に翁靈舒の居る所に宿す(同趙紫芝宿翁靈舒所居⁽⁴⁷⁾)」)

問名僧盡識 名を問へば 僧は盡く識り
得句客方聞 句を得れば 客は方に聞たり

(同「游雁蕩山八首・靈巖⁽⁴⁸⁾」)

冷落生愁思 冷落として 愁思を生じ
衰懷得句稀 衰懷 句を得ること稀なり

(徐璣「秋夕 趙師秀を懷ふ(秋夕懷趙師秀⁽⁴⁹⁾)」)

「句」と「法」とは、依存しあう関係にある。四靈の詩句の中で「法」を論じたものに次のような例がある。

古今稱句法 古今 句法を稱す
鳥賀是僧身 鳥賀 是れ僧身

(徐照「葛朴翁に寄贈す⁽⁵⁰⁾」)

悟得玄虛理 悟り得たり 玄虛の理
能令句律精 能く句律をして精なら令む

(徐璣「徐道暉の集を読む(讀徐道暉集⁽⁵¹⁾)」)

近日有誰論字法 近日 誰か字法を論ずる有らん
似聞檢法是同師 聞くに似たり 檢法 是れ 同師

(徐照「徐文淵に寄す(寄徐文淵⁽⁵²⁾)」)

四靈が詩を論じる「話頭」の中で、「法」は常に觸れられているわけではないが、しかし、「法」は句を重んじる詩派の、まさに核心をなすものである。先に引用した韋居安『梅磎詩話』「杜小山未嘗て句法を趙紫芝に問ふ」の條からも、「句法」「句律」が四靈の詩學の核心をなす概念の一つであることがわかる。

「苦吟」は、四靈詩派の創作態度として最もよく知られたものであり、また、晩唐の賈島・姚合詩派から受け継いだ最も重要な性格である。「苦吟」「苦思」は、當然ながら、四靈がしばしば取り上げる「話頭」であった。

吟有好懷忘瘦苦 吟は好懷有りて 瘦苦を忘れ
貧多難事壞清閑 貧は難事多くして 清閑を^{こぼ}壞つ

(徐照「山中 翁卷に寄す(山中寄翁卷⁽⁵³⁾)」)

君愛苦吟我喜聽 君は苦吟を愛し 我は喜びて聽く

世人誰更愛清才 世人 誰か更に清才を愛せん

〔◆愛 『全』,「重」に作る。〕

(同「翁卷の書齋に宿る(宿翁卷書齋⁽⁵⁴⁾)」)

昨來曾寄茗 昨來 曾て茗を寄す

應念苦吟心 應に苦吟の心を念ずべけん

(同「觀公を訪ねて遇はず(訪觀公不遇⁽⁵⁵⁾)」)

孤坐形生影 孤坐すれば 形 影を生じ

窮吟谷應聲 窮吟すれば 谷 聲に應ず

(徐璣「林中 翁卷に奉酬す(林中奉酬翁卷⁽⁵⁶⁾)」)

五字極難精 五字 極めて精なり難く

知音合有名 知音 合に名有らん

磨礱又鬢改 磨礱 又鬢 改まり

收拾一編成 收拾 一編 成る

(同「翁卷の詩集の後に書す⁽⁵⁷⁾」)

傳來五字好 傳へ來る 五字 好しと

吟了半年餘 吟じ了る 半年餘

(翁卷「葛天民に寄す⁽⁵⁸⁾」)

蘭芷芳條潔 蘭芷 芳條 潔く

瀟湘翠色連 瀟湘 翠色 連なる

從來苦吟思 從來 苦吟の思

歸賦若多篇 歸り賦せば 篇多きが若し

(同「徐靈淵永州司理を送る(送徐靈淵永州司理⁽⁵⁹⁾)」)

已是窮侵骨 已に是れ 窮 骨を侵す

何期早喪身 何ぞ期せん 早に身を喪ふを

分明上天意 分明たり 上天の意

磨折苦吟人 磨折す 苦吟の人

(同「徐山民を哭す(哭徐山民⁽⁶⁰⁾)」)

寄言苦吟者 言を寄す 苦吟の者

勿棄攝生訣 棄つること勿れ 攝生の訣

唐體を尚び、専ら晩唐を宗とすることから、句を重んじ法を尚び、苦吟を宗旨とするということまでが、永嘉の四靈の詩學の核心を成している。彼らは分析こそ加えていないけれども、その主張はきわめて明確である。それと同時に、いわゆる四靈の詩學とは典型的な近體詩の詩學に他ならないこともはっきりわかる。近體詩學發展の歴史の中で、四靈はまことに重要な地位を占めているのである。

四靈が詩を論じた以上のような「話頭」には、理論的な形式が缺けているけれども、しかし彼らの詩學の主義主張を世に廣めるのに有効な力を持っていた。それは、口頭禪のように、具體的な創作に對してきわめて有効に啓示を與え指導力を發揮したのである。ここで再び、劉克莊の「舊には止だ四人のみ律體を爲りしに、今は天下を通じて話頭行はる」という表現を思い起こしてみるならば、そこに深く豊かな理解が秘められていることがわかる。四靈の「話頭」とは、唐體を尊崇する主張を世に廣めるのに、重要な働きを示した存在であったと言ってよいのである。この視點から考えると、四靈という詩歌の流派に理論的構築が缺けていたとは、單純には言えない。

唐體と法度を尚ぶことを含む四靈の詩學思想について、葉適らの人々はいまだその深い意義を明らかにすることはできなかった。その本質は、「詩道」を強調するということにある。「詩道」に合致した詩を作るということは、彼らの詩學の理念に照らして真正なる詩を作るということに他ならない。四靈の考えでは、詩歌創作の眞の目的とは、表現主體〔作者〕の思想感情を表すことではなく、個性的な風格を創造することでもない。眞の目的は、詩歌藝術そのものを創造するところにある。詩歌藝術そのものとは、彼らが「風騷の精〔詩經と楚辭の精髓〕」と呼んでいるものである。このような藝術哲學においては、詩歌藝術すなわち「詩道」とは、ある意味から言えば、詩人主體の外部に獨立して存在するものであり、詩人の創作の目的は、「詩道」に合致した詩を作り上げることなのである。彼らが唐體に學んだのも、唐體が詩道に最も符合していると考えたからである。四靈のこのような詩學思想は、彼らの詩論の中には明確には表現されていないが、葉適の「徐文淵墓誌銘」の中に記載された、徐璣が書法を論じた短いエピソードの中に、この種の藝術哲學が全面的に表現されていて、四靈と苦吟派の詩人を理解するための恰好の重要文獻となっている。

徐璣は、魏人單煒^{たんゐ}の書法の教えを知り、心にその教えの據って立つ根據を悟るとこ

ろがあった。片時も紙と筆とを身から離すことなく、晩年に至ってその書は「蘭亭序」にやや近づいた。わたしは彼に、「自分自身の書體を確立すべきである。どうして『蘭亭序』の書體を目指す必要があるのか」と言った。すると、彼は、「いやそうではない。天下の書は、篆・籀・隸・楷、みな同一の法則がある。法則が備わり力量が達すれば、みな同一の『體』となる。『蘭亭序』を會得できないならば、それはまだ力量が達していないということだ。自身の書體など確立できはしない」と答えた。彼のこの論を聞いて、わたしは大いに驚いた（得魏人單煒教書法，心悟所以然。無一食去紙筆，暮年書稍近蘭亭，余謂君，當自成體，何必蘭亭也。君曰，不然。天下之書，篆籀隸楷，皆一法，法備而力到，皆一體。其不能爲蘭亭者，未到爾。非自成體也。此論余尤駭之⁽⁶²⁾）

〔◆單煒 周密『齊東野語』卷十二「姜堯章自敘 單丙文附⁽⁶³⁾」に據れば、沅陵の人。葉適が「魏人」と書いた根據は不詳。◆體 ここでは、字體という意味ではなく、書き手の努力・訓練の結果、何らかの境地に達した書きぶりという意味を表している。ただし、徐璣が、書そのものに本質的に備わっている非個性的なものを指して「體」と言っているのに對して、葉適の言う「體」は、書き手それぞれによって個性化された書きぶりの境地を表している。故に譯文では、徐璣の用法を「體」、葉適の用法を「書體」と譯し分けた。〕

葉適を大いに驚かせた、徐璣のこのような書法に對する見解は、新たなものを作り出すことを重んじ、個性を重視し、それぞれが自分自身の書體に達するという、我々にとって耳慣れている書法理論とは、確かにたいへん異なっている。彼のこのような書學思想は、實際には、藝術の本質と藝術の法則を重視した藝術哲學となっている。天下の書は、いずれも同一の法則に律せられ、かつ一つの體に歸結する。ここで言う一體、一法とは、書法藝術の本體であり本質である。本質を悟り把握し本體を明らかにすることなく、いわゆる個性や創新を追求するならば、そこで「體」と考えられているは、眞の「體」ではないのである。眞正の「體」というものは、道にとっての理というのと相近いものである。徐璣の書法におけるこのような「一法」「一體」の論は、唐體を尊崇し、法度を重視し、苦吟をこととする彼の詩學思想と相通じており、それと一致しているとさえ言い得るのである。

注

- *1 錢志熙「試論〈四靈〉詩風與宋代温州地域文化的關係」（2005年宋代文學年會論文（杭州）。後『文學遺產』2007年第2期に発表した（省略あり）。
譯者補記——「『四靈』の詩風と宋代温州地域文化との關係について」のタイトルで、『江湖派研究』第2輯（江湖派研究會，2012）に翻譯が發表されている（種村和史譯）。
- *2 翁卷「和陳待制秋日湖樓宴集篇」に、「侍臣設芳筵，開樓玩澄景。懷我林下人，招携共觀省」と言う〔『葦』162／『全』2673-50-31406〕。
- *3 本論で引用した四靈の詩篇は、いずれも陳增傑校點『永嘉四靈詩集』（浙江古籍出版社，1985）にもとづいた。引用が煩瑣になることを避け、本論で引く四靈の詩句は、すべて集の名と卷數帖數を注記しなかった。
- *4 元・韋居安『梅磴詩話』卷中（丁福保『歷代詩話續編』，中華書局，1983〔中冊562頁〕）。
- *5 劉克莊『後村大全集』卷十六（四部叢刊本）。
- *6 姜書閣『陳亮龍川詞箋注』（人民文學出版社，1980，45頁）。
- *7 吳之振等編『宋詩鈔』『秋崖小集鈔』（中華書局，1980，2796頁）。
- *8 宋・吳可『藏海詩話』（歷代詩話續編本，上冊336頁）。
- *9 錢志熙「杜甫詩法論探微」（『文學遺產』2001，第4期）。

補注

- (1) 南宋時代，永嘉（浙江温州）で活動した四名の詩人。徐照（？～1211），字は道暉，一の字は靈暉，徐玘（1162～1214），字は文淵，號は靈淵，翁卷（生卒年不詳），字は續古，一の字は零舒，趙師秀（1170～1219），字は紫芝，號は零秀。四名とも，東晉時代，永嘉の太守としてこの地の文學的始祖となった謝靈運（385～433）に因み，字や號に「靈」の時を用いた故に「四靈」と稱される。
- (2) 1150～1233。字は正則，水心先生と稱される。永嘉の人。永嘉事功學の代表的學者。
- (3) 1197～？。葉適の弟子。
- (4) 1187～1269。四靈の文學的後繼詩派である江湖派の代表的詩人。
- (5) 1227～1307。宋元の際の詩人。編著に『瀛奎律髓』がある。
- (6) 1137～1203。性理の學を空論として批判し，永嘉の學の先驅けとなった。
- (7) 『芳』中，45／『全』2671-50-31380。
- (8) 「秋夜 偶たま書す」〔『清』補遺，270／『全』2842-54-33859〕。
- (9) 『芳』上，3／『全』2670-50-31358。
- (10) 『二』上，108／『全』2777-50-32864。
- (11) 『葦』，177／『全』2673-50-31413。
- (12) 『清』，230／『全』2841-54-33840。
- (13) 「詩の後に題す（題詩後）」，『全唐詩』574-6692。

- (14) 辛更儒撰『劉克莊集箋校』，中國古典文學基本叢書，中華書局，第9冊 3983頁。
- (15) 『全』 3048-58-36356。
- (16) 其の二，『全』 3043-58-36293。詩題は，「次韻實之春日二首」を初度とする第四回目の唱和詩の意。
- (17) 『全』 3204-61-38351。
- (18) 『芳』 中， 47 / 『全』 2671-50-31382。
- (19) 『二』 上， 114 / 『全』 2777-53-32866。
- (20) 前掲補注 (8)。
- (21) 『水心文集』 卷十七，『葉適集』，中華書局排印本，1961，中冊 321頁。
- (22) 『水心文集』 卷二一，『葉適集』，中華書局排印本，1961，中冊 410頁。
- (23) 『芳』 上， 27 / 『全』 2670-50-31370。
- (24) 『芳』 中， 61 / 『全』 2671-50-31388。
- (25) 『二』 下， 139 / 『全』 2778-53-32879。
- (26) 『清』， 220 / 『全』 2841-54-33834。
- (27) 『清』， 237 / 『全』 2841-54-33423。
- (28) 『芳』 上， 1 / 『全』 2670-50-31357。
- (29) 『二』 上， 100 / 『全』 2777-53-32860。
- (30) 南宋・魏慶之『詩人玉屑』 卷十「圓熟」に，「謝朓嘗語沈約曰，好詩圓美，流轉如彈丸。故東坡答王鞏云『新詩如彈丸』，及送歐陽弼云『中有清圓句，銅丸飛柘彈』，蓋謂詩貴圓熟也」と言う（上海古籍出版社，1978，上冊 221頁）。蘇軾の「答王鞏」は，『全宋詩』では「次韻答參寥」の詩題で，「新詩如彈丸，脫手不暫停」と言う（『全』 801-14-9282）。清・馮應榴撰『蘇文忠公詩合注』では，「次韻答王鞏」の詩題で，卷十九に載る（中國古典文學叢書『蘇軾詩合注』，上海古籍出版社，第3冊 930頁）。
- (31) 『清』， 234 / 『全』 2841-54-33841。
- (32) 『全唐詩』 224-2396。
- (33) 前掲補注 (28)。
- (34) 前掲補注 (9)。
- (35) 『芳』 上， 33 / 『全』 2670-50-31374。
- (36) 『二』 上， 111 / 『全』 2777-53-32865。
- (37) 『二』 上， 112 / 『全』 2777-53-32865。
- (38) 『二』 上， 118 / 『全』 2777-53-32869。
- (39) 『二』 下， 154 / 『全』 2778-53-32886。
- (40) 『葦』， 169 / 『全』 2673-50-31410。
- (41) 『葦』， 169 / 『全』 2673-50-31410。
- (42) 『葦』， 192 / 『全』 2673-50-31419。
- (43) 『葦』， 193 / 『全』 2673-50-31420。
- (44) 『清』， 249 / 『全』 2841-54-33848。
- (45) 『芳』 上， 4 / 『全』 2670-50-31359。
- (46) 『芳』 上， 6 / 『全』 2670-50-31360。

- (47) 『芳』 中, 51 / 『全』 2671-50-31384。
- (48) 『芳』 中, 56 / 『全』 2671-50-31386。
- (49) 『二』 下, 140 / 『全』 2778-53-32880。
- (50) 前掲補注 (24)。
- (51) 『二』 上, 130 / 『全』 2777-53-32874。
- (52) 『芳』 中, 52 / 『全』 2671-50-31384。
- (53) 『芳』 上, 12 / 『全』 2670-50-31363。
- (54) 『芳』 上, 14 / 『全』 2670-50-31364。
- (55) 『芳』 上, 16 / 『全』 2670-50-31365。
- (56) 『芳』 中, 66 / 2671-50-31392。
- (57) 前掲補注 (25)。
- (58) 前掲補注 (11)。
- (59) 『葦』, 178 / 『全』 2673-50-31414。
- (60) 『葦』, 184 / 『全』 2673-50-31416。
- (61) 『清』, 220 / 『全』 2841-54-33835。
- (62) 前掲補注 (22), 411 頁。
- (63) 唐宋史料筆記叢刊, 中華書局, 1998, 212 頁。

本翻譯は、日本學術振興會、平成 24 年度科學研究費、基盤 (B)「南宋江湖派の總合的研究」による研究の成果の一部である。